二十六　ピケティ旋風

一冊の本が世界に旋風を巻き起こしている。表題は『二十一世紀の資本』、著者はT・ピケティというフランスの若い経済学者である。二〇一三年にフランスで出版されたこの本は、去年、竜巻の本場のアメリカ合州国で英語版になると旋風を発生させた。そのことを風の便りに聞いていたので、暮れに日本語訳が出ると知ってすぐに注文した。旋風は、ヨーロッパに舞い戻り、日本にも到達する。

マス・メディアの話題は速やかに移りゆきわれわれの注意を散逸させるが、二〇〇八年のリーマン・ショックのとき、合州国で、資金繰りに窮したが大きすぎてつぶせない金融会社や大企業に対し、緊急に国民のお金を使って救済が行なわれた。それから間もないのに、救済された会社の経営者たちが以前と変わらぬ高額の報酬を得ていることを知って、二〇一一年、その他大勢の人々の異議が爆発した。「ウォール街を占拠せよ」運動である。格差は見えにくくされているが、それでも、一九八〇年代からの経済政策によって富の格差の拡大している実態がしだいに明らかになり、「われわれは九十九パーセントである」と知った人々が、あまりにひどい富の格差は不公正だと訴えたのである。

格差の広がりは合州国だけではない。世界で拡大している。その現状を、国際非営利組織オックスファムが今年一月に発表した。世界の富裕層の上位一パーセントが所有する資産は、二〇一四年で世界の全資産の四十八パーセント、二〇一六年には五十パーセントを超える、と。「ウォール街を占拠せよ」運動は世界に共感を呼び起こしたが、街頭活動を長く維持することはむずかしい。それでも、自分が九十九パーセントに属するという認識は世界中に広まっていると思われる。そういうところにピケティの本が出版され、旋風となった。日本も、一九八〇年代から合州国の経済政策のまねをしているから、合州国ほどではないけれども格差はどんどん広がっている。ピケティの本は、分厚い経済学書ながら、ベストセラーになることが確実だ。だが、現在の日本人の意識の状況では、一パーセントの富者は旋風が台風に発達することはないとたかをくくっているだろう。

日本語版『二十一世紀の資本』(みすず書房)は、一ページ一千文字、グラフと表を含んで六百ページもある。読み通すにはある程度根気がいるが、多くの人が読んで富の格差の問題を社会の話題にしてほしいものだ。著者は、現在の壮年と同じバックグラウンドを共有しているように見える。ついでに言えば翻訳者も若い。文章が重くないことが、この種の書物にありがちな堅苦しさを和らげている(ただし、言葉の精度に疑問なところがある)。

もともとピケティの文章が広い読者を想定して書かれているのだろう。バルザックやオースティンの小説を使って貧富の問題へといざなう。

文学を小道具に使うのは、著者の問題意識が狭い経済学に閉じていないことと関係している。実際、イントロダクションでそのことを表明してさえいる。合州国に渡って経済学の研究に従事したが、アメリカ流経済学に違和感をおぼえてフランスに戻ったのだという。批判は、経済学にとどまらず、アメリカ流社会科学全般に及ぶ。「社会科学がおおむね富の分配や社会階級の問題について、一九七〇年代以後はほとんど関心を失ってしまったという事実は残念だと思っている」と言い、社会科学全体としての手法を活用して、「根本的な問題から出発してそれに答えようとすべきだ」と主張する。この判定は、以前わたしが合州国のヤングという人の著作『正義への責任』を読んで感じたもの足りなさ（「蝶の雑記帳十八」）に符合する。わたしの違和感は、まんざら的はずれではなかったのだ。次のように言うピケティの見解が正しいと思う。

――格差の歴史とは、激動の社会変化の影響を受け、経済的要素以外に、無数の社会、軍事、文化現象に突き動かされた、常に混沌とした政治的な歴史だ。……社会集団間の所得と富の不均衡は常に、他の領域での各種展開の原因であると同時に結果でもある。……富の分配の歴史は、もっと大きな国の歴史を解釈するための手段となる――。

ただし、この本を肯定的に読みながら、マルクスをかじったことのあるわたしは、その論述が厳密な理論を構成しようとするマルクスの流儀と違うことを感じていた。最重要な用語「国民所得における資本の割合」や「資本の収益率」が、概念として厳密に定義されていないのではないか。資料が十八世紀からしか存在しないので、示される経年的な動向の図表は、横軸が一七〇〇年から始まる。だが、もっと昔からの富の集中についても、その図表を外挿するような口ぶりで語る。「資本」という言葉が拡大解釈して使われているようだ。古代にも中世にも、富とその所有の形態は近代と違っていた。商業資本はしだいに増大してきたとはいえ、農地を支配する封建的な遺制が一七〇〇年代にも根強かった。産業に投資して利潤をあげて資本を増殖するシステムが支配的になったのは、十九世紀に入ってからのことではないか。それらをひっくるめて経年的に見るとすれば、資産のようなものを論じているのではないか、と思った。もっとも、疑問をこのように表現にまでもたらすことができたのは、あとでふれる伊東光晴の批評を読んだおかげである。

何にしても、さまざまな資料を集計して得られる一七〇〇年以来の資産集中度の動向が、はっきりと一つのパターンを示していることは疑いえない。データ処理能力の向上のおかげでそれが可能になったのだ。その統計処理の精度を上げる余地があるとしても、定性的

な議論が可能なグラフを抽出した点が、この書物の最大の貢献だろう。物理学との対比で言えば、新しい現象論を提出したことになると思う。このように可視化したグラフのパターンで富の集中度の歴史的な動学を議論すれば、問題の理解が深まるだろう。

『二十一世紀の資本』が評判をとることを見越して、日本語版の発売後まもなく、雑誌『世界』三月号が、「不平等の拡大は防げるのか」という特集を組んだ。国内国外四人の論者の論考の中で最初の、京都大学名誉教授伊東光晴の批評が、この書物の価値と追加すべき論点とを的確に指摘する。近代経済学の流れを汲むがマルクス経済学にも造詣の深い学究は、これまでの経済学の理論を無視するピケティの厳密でない議論にいら立っているように見える。論考のタイトルは「誤読・誤謬・エトセトラ」で、「誤謬」はピケティの不正確を衝く。ピケティの言う「資本」は資産のことだと断じ、ピケティが格差の拡大をもたらす経験的な法則として本の帯にも印刷されている不等式は、不正確で法則の名に値しない、と。しかし、政府の審議会で現実の経済政策に貢献してきた老練な学者は、最近世にかまびすしいアベノミクスとやらの三本の矢を折ったばかりだが、ピケティの主張をまったく退けるのではない。

論考最後の節は「社会的公正の推進を」と題し、「ピケティの新著から私たちが引き出

さなければならないものは何か」と問い、やはり「経済的不公正を正すこと」だと説くのである。そして、「この本に欠けているもの」が、一九八〇年以後の新自由主義政策がもたらした所得格差の拡大であることを指摘する。問題なのは、ピケティが論じない現代の資本主義の病である。新自由主義の病への対策こそ重要だというのである。具体的には、非正規雇用の増大などの問題がある。ピケティが軽んじたジニ係数があぶり出しているのは、同じように働いていながら収入格差をもたらす不公正である、これを正さなければならない、と思慮深い老経済学者は言う。

ピケティが使う capital という言葉は、「マルクスが言う資本でも、近代経済学（ケインズなど）が言う資本でもない」と指摘する人は、「（マルクスの）経済学にも、今に残るその思想にも関係はない」し、「サルトルからアルチュセールに流れる（フランス）知識人の流れとは無縁である」と感慨を述べる。それは、この本を読みながらわたしが感じたように、世代の移行が完了したことを意味するだろう。一九八〇年以後に成年に達した人たちは、老経済学者とはバックグラウンドが異なり、新たな思潮を育みつつあるのだ。四十三歳のピケティには、彼が合州国で感じた社会科学の低迷を抜け出す「理論」を再構築する課題があるのである。その手始めの仕事が、経済の歴史を読みなおし、「歴史統計」による現

象論を提出することだった、と考えることができる。

――すべての人間社会において、保健医療と教育には本質的な価値がある。長いあいだ健康を満喫できる能力は、知識や文化を獲得する能力同様に、文明の基本的目的のひとつだ。……各個人が教育、文化、健康の効用を、自分自身と他人のために追求する自由が極大化された理想社会…、そこではみんながかわるがわる教師か生徒、作家か読者、医者か患者になるわけだ――。ピケティが理想社会の一端を描くこの文章は、近代の興隆期だが産業資本主義がすでにほころびを見せ始めた時代に、理想社会を提示したマルクスの口調に似ているではないか。資本主義が爛熟してカジノ化に行き着いた金融資本主義の時代、もう一度理想を掲げて社会を改革する必要がある。合州国では、『二十一世紀の資本』を二十一世紀の『資本論』と「誤読」して、ティ・パーティなどの右派からの攻撃があるそうだ。しかし、ピケティは中道の改良主義者だ。制度が機能不全におちいり思想が混乱している現代の世は、資本主義の矛盾が極限に達しようとする中で、もう一度改良主義をつくり出さなければならない状態にあるのだ、と老園丁は思う。

二〇一五年李の花の咲く頃